

京町家を自然史博物館に ～自然史レガシー継承・発信事業の試み～

兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員 高野 温子

1. はじめに

2019年に日本で初めてICOM（国際博物館会議）が京都で開催される。内外の注目が国内外の博物館に集まる機会に、自然史系資料の重要性と価値を広く社会にアピールすることを目的として、文部科学省の公募事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」に自然史系博物館8館（北海道博物館・栃木県立博物館・国立科学博物館・三重県総合博物館・大阪市立自然史博物館・橿原市昆虫館・北九州市立自然史・歴史博物館 事務局：兵庫県立人と自然の博物館）で実行委員会を組織して応募した。公募の存在が明らかになったのが2016年3月で、それから約3週間で調整と申請を行い、無事に採択が決まったのが6月末と、慌ただしいスケジュールだった。展示は2016年11月下旬から2週間、京都市指定の重要文化財である京町家、野口家住宅花洛庵を会場に、協力館8館の収蔵資料を集めて自然と文化の関わりをテーマとした展示を行った。京町家で様々な自然史系資料を展示する試みはおそらく世界で初めてであり、ユニークベニユーの一事例として、また自然史資料と文化の融合を試みることで得られた知見を報告する。

2. 町家を自然史博物館に ～試行錯誤～

1) 展示空間としての町家

会場となった野口家住宅花洛庵は300年にわたって代々呉服商を営まれており、現在も9代目当主が実際に居住されている。今回展示で使用させて頂いたのは、かつて店舗として使用されていた玄関部分のスペースで、使用可能な面積は1,2階あわせて約125㎡、2階は天井が低く梁までの高さが最も低いところで約140cm、1階と2階の大広間には照明レールが配置されていたが、6畳の和室には家屋用の照明器具のみ、一階の大広間を床敷きにして使える他は、畳敷きの和室だった。重要文化財指定の家屋のため、屋内に一切の傷や跡を残すことはできない。手入れの行き届いたそれぞれに趣の異なる坪庭、雪見障子、凝った意匠の欄間や引き戸、年代を感じさせる階段筆笥など、家屋のしつらえだけで日本文化と歴史を感じることができる居心地のよい空間が成立していた。ここに何か標本類を置くことで調和を乱す可能性が高い。当然ながら、博物館の展示室と大きく異なり、室内に置くことができる展示物はかさばらず軽いものに限られる。もちろん普段使っているガラスケースや棚等の

展示什器の多くは使えない。町家という文化的な空間が醸す雰囲気乱さず損なわず、自然史の展示をどう展開するか、何をどう置くのか、展示のボリュームをどのくらいにするのか、誰も経験が無いこともあって、迷いながらの作業となった。町家のもつ価値と自然史資料の価値を両方ともに引き立てるには、選ばれた資料をごく限られた数で配置するしかないと最後には割り切ったのだが、結果的にそれは正解だったと思う。

2) 展示コンセプトと内容

京町家での開催ということで、文化と自然の関わりをテーマの中心に据えた。自然史の視点からみれば人類の歴史はたかだか数百万年、他方で生物の歴史は30数億年である。つまり、人類の発展は人類誕生に至るまでの生物の進化と、それによってもたらされた生物多様性が文化の基盤になっているという視点は自然史科学の専門家として外せない。そこで町家の土間の部分を展示導入部分とし、人類以前の生物進化をたどる化石資料を古生代・中生代・新生代と地質年代順に並べた(図1 兵庫県立人と自然の博物館所蔵 以下、展示物の出展が明記されていないものは、すべて兵庫県立人と自然の博物館所蔵)。化石資料は日本の地層から産出したもので揃えた。たたきの部分に猿人・原人・現代人の頭骨レプリカ(国立科学博物館所蔵)を展示し(図2)、人類の誕生と自然との関わりが始まることを暗示した。

人類誕生以降の展示部分は、①京都にゆかりの深い生き物の展示、②京都から発信された文化の展示、③京都に集まってきた特産物の展示に区分した。

会場をお借りする交渉のなかで、花洛庵当主の野口誠氏から「花洛庵が所蔵する羽毛で飾られた陣羽織があるが、何の鳥の羽根なのか調べてほしい」という依頼があった。300年程前の有力戦国武将が着用していたという伝承のある陣羽織で、近くで見ると緑色に輝き、遠くから見ると黒色に沈む構造色を持つ鳥羽根で覆われている。会期中展示をしても良いとおっしゃる。陣羽織は人が自然の産物を利用して作り上げたものの一例として、また羽根の正体を最新の自然科学と標本コレクションを駆使して解明できれば、自然史系博物館の力量を発揮できる展示として活かせると考え、調査依頼を受けた。まず陣羽織から落脱していた羽根



図1 人類以前の生物進化を示した化石類。
写真手前から奥に向かって時代順に展示物を配置した。



図2 土間に置かれた猿人・原人・現代人の頭骨レプリカ

を数本取り出し、羽軸から DNA 抽出と塩基配列決定を試みたが、想像以上に劣化が進行していたため、失敗に終わった。そこで何名かの研究員で議論しつつ候補となる鳥をキジ、アオバト、オシドリの3種に絞り込み、それらの鳥の羽根と陣羽織の羽根の構造を、構造色の専門家である大阪大学の齋藤彰先生に分析依頼した。結果、3種の鳥の羽根の構造はそれぞれ明確に異なっており、陣羽織の羽根はキジの羽根に酷似することが分かった。伝承ではクロヤマドリの羽根と言われていたが、今回の調査でキジである可能性が高まった。①の展示は陣羽織



図3 展示室一階の様子。陣羽織と構造色を示す昆虫類（写真右の棚）、日本産アゲハ蝶全種（写真中央の棚 上段）、4本脚と6本脚のチョウ（写真中央の棚 中段）



図4 坪庭とそこに生えるシダの標本、Moss-Light LED



図6. Moss-Light LED。花洛庵の坪庭他、一般の苔庭に使用されるコケを中心に

と羽根の解析結果、キジはく製を中心に据え、他に候補となったオシドリとアオバトのはく製、構造色を持つ昆虫を並べた。また、陣羽織の背側に描かれた揚羽蝶紋に掛けて日本産全種のアゲハ蝶標本（三重県立総合博物館 / 北九州市立自然史・歴史博物館の合作）、4本脚、6本脚のチョウ標本（橿原市昆虫館所蔵）（図3）、京都で発見され京都を最後に絶滅した魚ミナミトミヨの標本（大阪市立自然史博物館所蔵）、若沖の画に描かれた昆虫の標本、花洛庵の坪庭に生えるシダとコケ（図4）、シダを食べる昆虫の標本（キンイロエグリタマムシ：栃木県立博物館所蔵）、町家にも使われる材標本、京料理に使わ



図5 坪庭越しに見えるほ乳類はく製

れる昆布のプラスティネーション標本を掛け軸風に仕立てたものの、京都に見られるほ乳類（タヌキ、ツキノワグマ、ニホンウサギ、ホンドギツネ、ニホンザル、図5）と両生爬虫類（タイマイ、オオサンショウウオ：三重県立総合博物館所蔵）のはく製を縁側の廊下に配置した。コケは人と自然の博物館の秋山研究員を通じて、Moss-Light LEDの作者である内野敦明氏に、町家の坪庭に生えるコケを中心に出品を依頼した（図6）。

2 階の 6 畳和室では、京都から発信された文化の一例として、柳田國男が方言圏論を提唱した蝸牛考の初版本（河野甲氏 所蔵）、皮革造形作家である河野甲氏が制作したカタツムリのレプリカ（殻は実物、軟体部はシリコン製）を座卓にならべ、一つの部屋に配置した（図 7）。もう一つある 6 畳和室では、地域の特産物が京都に集積された例として炭に着目し、茶道で高級品とされる兵庫県川西市産の菊炭、料理で珍重される和歌山県産？の備長炭と、里山



図 7 カタツムリ模型（河野甲氏制作）

の主な構成種で炭の原料になるコナラやクヌギ、アラカシの葉やドングリを並べた（図 8）。2 階の広間には日本産のツル 3 種（タンチョウ：北海道博物館所蔵、マナヅル、ナベヅル：姫路市科学館所蔵）とコウノトリのはく製を並べ、細やかな絞り技法で鶴亀紋様が描かれた花洛庵所蔵の振袖（江戸後期）を展示した（図 9）。ツルは言うまでもなく縁起の良い意匠であり、昔から器や着物、掛け軸等に使われている。振袖の少し後ろに絹の原料となるカイコガと繭のセット（栃木県立博物館所蔵）を展示し、着物が自然の恵みに由来することもアピールした。



図 8 茶道の道具と白炭・黒炭



図 9 コウノトリとツル 3 種（タンチョウ、ナベヅル、マナヅル）、絞り技法で鶴亀紋様を表した振袖（花洛庵所蔵、江戸時代後期の作）。

3) 自然史系博物館同士の連携

第 1 回目の自然史レガシー継承・発信実行委員会は、2016 年 8 月 24 日に京都で開催された。その際に当初の展示案を各委員に示し、会議後に全員で展示会場となる花洛庵に足を運び、陣羽織の実物を閲覧した。会場をゆっくり見学しながら展示レイアウト案を検討頂き、いろんなど意見を頂いた。「空間が素晴らしいので、あまりごちゃごちゃものを置かない方がよい。一階は陣羽織だけ、あとはなににもなくてもよい」との意見まであった。その時点で提出したレイアウト案では、もっと多くの展示物を置く計画になっていたが、議論の結果、案をいったん白紙に戻した。結果的に委員会に参画した全 8 館と協力館 2 館から出展頂くこ

とになったため、各館の担当者とのような展示物を出していただくのか、寸法や、キャプション文言や搬出入の具体のやり取りをしつつ、レイアウト最終案がほぼ固まったのが9月末だった。実行委員の方々は展示設営経験が豊富な方ばかりで、こちらの提案に斜め上の視点からアイデアがどんどん返ってくるのも、楽しさと同時に為になる経験だった。

3. 来場者数と展示を観た感想

初日の11月19日(土)は20数名と苦戦したが、20日(日)に開催した「日本庭園の伝統と海外での展開」(講師：中瀬勲 人と自然の博物館 館長)、23日(水・祝)の「京町家 坪庭に生きるコケたち・あかりとコケ」(講師：秋山弘之 人と自然の博物館 主任研究員・内野敦明 Moss-Light LED 制作者)、26日(土)の「戦国武者を飾った陣羽織の羽根の謎：ミクロの科学で知る生物の知恵」(講師：大阪大学 齋藤 彰准教授)、という3つの関連セミナーにはいずれも定員を上回る参加を頂いた。写真を撮っている来場者に積極的にSNSで発信して欲しいという呼びかけた結果、口コミやSNSを見てきました、とおっしゃる来場者が日を追うごとに増えた。20日に京都新聞、27日に神戸新聞や読売新聞に記事が掲載されたことも追い風になり、最終日の4日には前日の倍近い177名の入場があった。16日の会期中に訪れた有料入場者は705名、無料空間のみの観覧、招待者等を入れた全入場者は977名となった。受付でアンケート用紙を配布したが、320名の方から回答を頂いた。回答者は30-40代が133名と一番多く、ついで50-60代(99名)となった。一番印象に残った展示は、陣羽織、カタツムリ模型、Moss-LightLEDがほぼ同数でトップだった。記述欄には、町家と自然史標本の相性の良さに驚く声、次回の企画や巡回展を期待するコメントが目立ち、今回の企画を来場者に好意を持って受け止めて頂けたことに安堵した。

4. 町家展示の発展形は

今回は京町家を使った初めての自然史系の展示として、来場者には新鮮な驚きと好感を持って受け入れて頂いた。我々の想像以上に町家と自然史標本の親和性は高かった。その理由はいくつか考えられる。日本の伝統的家屋がもともと様々な自然素材を利用し、自然と調和した様式で建てられていること。坪庭には光や風を家の中に取り込む機能の他、部屋から眺めて心を落ち着かせ和ませる役割があり、そこに風景の一部として動物のはく製や標本など、自然史の資料が上手く収まったこと。特に評価が高かった Moss-LightLED は、光の少ない部屋に灯りをともし形になって部屋によく映えたこと。和蝋燭を灯す情景に似ているのかも知れない。2階は天井が低いので、座って観ることを前提として展示物を配置したが、結果として立ったまま鑑賞する通常の博物館よりも展示物と人の距離が近くなり、展示物をごく近くで座って眺め

る体験が、不思議な感覚を呼び起こしたのではないかと考えている。

今回の展示で、想像以上に日本家屋と自然史系資料の相性が良いことがわかった。今後の発展形として、日本各地に残る古民家やお寺、茅葺の家等でも、人と自然の関係をテーマとした展示は可能だと思う。例えば、古来より日本の家屋は建てられた場所の周辺に豊富にある素材を用いて作られており、屋根をふく茅一つをとっても地域によって用いる植物は異なる。それらを読み解いて展示に落とし込み、身の回りにある自然の恵みを上手く利用してきた事実を展示するフレームワークは汎用性が高いのではないだろうか。

1) 他所で実施するにあたって解決すべき課題

今回のように、博物館ではない場所での展示を企画する際に気をつけたいことは、その場所を使ってどんな展示をしたいのか、という思想を明快に持つことである。今回は文化の基盤となる自然に焦点をあてた展示を志向し、ストーリー性を担保した。限られた空間と展示物で、どの程度来場者に意図が伝わったかは心もとない部分もあるが、アンケートに回答くださった方々の多くには充分その意図が通じていたと思う。

技術的な課題を述べると、通常の展示空間とは色々と条件が異なるため、照明の位置、照明レールの有無、コンセントの位置、天井の高さ、梁の有無等、事前に空間をよく調べておき、京町家のように空間がそれ自体である種の雰囲気醸し出しているのか、展示物がない＝殺風景なのか、よく考えて展示のボリュームを調節することが必要である。日本家屋を展示空間としてつかう場合、重量のある化石資料は室内には置けない。また会場内でバックヤードを確保できなかったため、展示物の梱包材や段ボール箱等は、期間中は当館に持ち帰った。展示会場への搬入搬出経路、搬入・搬出時のトラックの待機場所についても、事前に入念な確認と運搬業者との打ち合わせが必要である。

5. 人材の育成

今回の展示に関わった我々がサポート役に回り、展示経験の少ない若手博物館員に企画立案、レイアウト案作成、会場や展示物の賃借の交渉から搬入搬出の段取りまで、主担当として関わってもらうことが一番の人材育成になる。当館は2002年からキャラバンと銘打ったアウトリーチ事業を少なくとも年に10箇所以上で展開しており、今回の展示設営等にもその経験とノウハウが十分に生かされた。それに加えて、展示デザイン会社と組んで完成度を上げること、他館の学芸員と一緒に展示レイアウトや展示の内容について多面的に議論をすることも有意義な経験となる。博物館員のスキルアップにはアウトリーチ事業は絶好の機会といえるだろう。

ICOM 京都大会の前哨戦という位置づけで、今回は京都の外の自然史博物館が集まって、あえて京都の自然をテーマとした展示を行った。これが可能になった理由の一つは、地方博物館が〇〇県の資料だけ、〇〇市の資料だけを集めるのではなく、日頃から行政区にこだわらず幅

広く資料収集を行ってきたこと、NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワークを通じた日常的な交流があったからである。本来なら、京都で自然の展示をするなら京都の自然を知り尽くした地元の学芸員がプランを練るのが好ましいが、残念ながら京都には自然史博物館がない。今回の展示が契機となり、京都の文化発信力を高める有力な方法として、レガシーとしての標本、京都の自然と文化に関する知の集積を継承するための拠点整備が進むことを期待したい。

6. 謝辞

本企画展の実施にあたっては、人と自然の博物館レガシー事業プロジェクトメンバー（プロジェクトリーダー：三橋弘宗。メンバー：橋本佳延、黒田有寿茂、布野隆之、三原菜美、中前純一、加藤茂弘、菊池直樹、橋本佳明、高橋鉄美、三枝春生、山内健生、秋山弘之、上田萌子、太田英利、大谷雅人、大平和弘、池田忠弘、半田久美子、鈴木武、八木剛、和田年史、高野温子）による展示物やキャプション原稿の準備、搬出・搬入、企画展開催中の日替わり当番等の全面協力を得た。

展示会場の受付・解説を担って頂いた大阪自然史センターの皆様、会場を快くお貸し頂いた花洛庵当主の野口誠様、展示デザインを担当頂いたアイデアルデザイン製作所の北村彰氏、展示レイアウトに有益なご意見を頂いた自然史レガシー継承・発信実行委員会の委員の皆様、展示物をお貸し下さった河野甲氏（カタツムリ模型）、内野敦明氏（MossLight LED）、京都薬科大学薬用植物園（植物封入標本）、姫路市科学館（ナベヅル・マナヅルはく製）に感謝を申し上げます。本企画展は、文部科学省委託事業「博物館ネットワークにおける未来へのレガシー継承・発信事業」の一部として実施した。